

アフメドフ・サブヒ  
歴史博士

## アゼルバイジャン国立歴史博物館 館のコレクションの日本武器

バクーにあるアゼルバイジャン国立歴史博物館（以降、博物館）では、日本の武器の多数のサンプルが保存されている。前号の雑誌の一つで博物館のコレクションの中に入っている「三角槍」という2本の槍について説明したまし（「IRS」 - 「遺産」2012年2号）。または、博物館において日本の槍の柄のユニークなサンプルと日本の兜が保存されている。

博物館に属している旗・武器ファンドのコレクションの中にある日本の槍の柄は長くて、刃が通って、湾曲した片面刃を持っている長い柄となっている。この柄は木造だし、横断面が楕円形だし、黒色塗料塗られている。槍の柄の上部に金めつき用の植物模様の装



飾がある。先端が柄に固定する所は金鍍金した、4つの銅リングで強固にした厚い革の細いリングで巻き付いている。槍の柄の上部に銅マフが付けられている。槍の柄の下部は円錐形で、おそらくそこに先端が付けられただろう（今は失われている）。

刃は鋼鉄だし、湾曲したし、片刃だし、赤色で短いフラーハンマーである。一方から刃は研がれていて、柄側に真っ直ぐで、終わりに曲がっている。刃には黒色に着色した木造の鞘が付けられる。鞘の中に先端の形に似ている深化がある。鞘の中心に金鍍金の象徴、表面の丸に五葉章、そして、裏面に三葉章が吹き寄せられている。

外国の博物館が持っている文献と展覧品の分析によってこのサンプルは「薙刀」という武器であると確実に推定できる。

薙刀は日本の伝統的な長柄武器の一種である。薙刀の使用に関する初言及は11世紀だと思われるが、専門家の一部はこの刀の使用が5世紀の終わり以来だと仮定している。15世紀までに薙刀は日本の主要な長柄武器で

あっても、その後に薙刀の代わりに槍が来たということだ。

薙刀の主要な用途は切削用に鋭利な打撃を与えることになっていた。薙刀は刺さる攻撃アタックのためだけではなく、掴む・切削用・切開する道具だったのである。おそらく、こういう多様性は日本の古典的な甲冑を切断できるが、非常に刺し難いことに関連しているだろう。または、柄の下部に先端があっただけでも、普通は研ぎ澄まされなくて、尖っただけだ。それは対立として武器のバランスをとるため、あるいは、停留所に武器を土地に刺すために用いられた。

かなり強大で重い柄のある持っているこの武器の使い方使用法は非常に難しく、特別な技能を必要とする。しかし、専門家の手で薙刀が恐ろしい武器である。戦士の両手は柄に対して活発だったので、様々な仰角を与えられ、撃破の距離と攻撃の方向の改変も可能だった。薙刀の使用法の解説が「薙刀術」と呼ばれる唯一の複合に連合された。日本において少なくとも425つの武道学校で



ミニアチュール  
『畑六郎左衛門時能』

薙刀術の戦闘技術が教え込まれたと思われる。興味深いことに、中世の日本では氏族の幾つかが第一に薙刀を中心として武器を使いこなすことを女性に教えた。したがっ

て、家に入り込んだ押し掛け客に対して使用できたので、薙刀がこの女性達の家でドアの上に特別な場所に保管された。薙刀の部品も違う名称を持っていた。例えば、先端が「ほ」、先端の刃が「尖先（切っ先）」、刀身の鈍い側が「刀背（むね）」、刀身のリブが「鑄（しのぎ）」、柄が「柄部」、固定用のマフが「鉤（はばき）、柄の巻き付ける所が「千段巻」と呼ばれたということ。

博物館で保存される日本の槍である「三角槍」、そして上述の「薙刀」が実際の戦闘武器で、中世時代の歴史展示となっている。それと同時に博物館のコレクションに（博物館のお土産・記念品ブランド）装飾的な武器である20世紀に中世のかぶとを基本にしても近代的な技術を使って作られた日本の兜が保存されている。それでは、兜の主要部分は金属鑄造であるが、垂直で一緒に鋳で留まった鉄の線条を描写するヘルメットからなっている。後ろの硬い板も鑄造され、首を保護する水平の板を描写している。兜

の主要部分は暗色であるが、兜の紐を描写する成分、あるいは、付けた板が金鍍金している。前へ出たかぶとの顔を覆う部分に火と雲からなっている紋章が付けられているが、その他に上部に上手に鑄造された龍の像が溶接されている。龍の前足が兜の顔を覆う部分に、後足が兜の頂に溶接され



薙刀の鞘

ている。龍の端に上に向く2つの鍬様で金鍍金の新芽が溶接されている。兜の顔を覆う部分の端に折り返し板が付けられている。兜には房で終わる赤色のぎっしり詰まって、よれた絹墨縄が縛り付けられている。利用できる文献および博物館の展示物の分析によってこの展覧品が巧みに作られた兜の贈り物の写

しであることを確立する可能にする。

普段普通は、侍の制服支給の中に兜、首の保護のために板付きのハーフマスク、鎧、肩飾り、袖当て、司祭が腰の脇につける長方形の錦章、膝掛と靴が入った。半球の日本兜は3-5世紀に現れた。兜は垂直で一緒に鋳で留まった鉄の線条から作られていた。後ろから兜に首を保護する水平の板が付けられた。これらの前へ出た上の板に侍の家紋が付けられた。兜の前部には目の保護のために「眉庇（まびざし）」という庇や2つの鍬様の角がリベットで留めた。

侍世代の多くにとって兜は保護具の役割を演じたのみならず、その上に神聖で象徴の価値を持っていた。ほとんどの場合は兜の基礎（はし）がニスと薄いセラミック層が塗られて、下から上までリベットされた6-8以上の鉄板から作られた。または、金属製の指板によって強化された皮革の基礎を持つことも可能だった。トップに輪の周囲を巡る換気空間が位置することが可能だった。首と耳を保護されるセグメント垂れは湾曲した金属板、まれ



薙刀の鞘（表面）



薙刀の鞘（裏面）

に幅の広い板から成っていた。それらはニスに塗り、絹墨縄か革紐を使って接続された。かなりしばしば高貴な戦士の兜が金めっきされた金属の角のペア（鋏形）で飾られた。これらの角は12世紀末に登場し、後で兜のいくつかで大きなサイズと違っていた。それらは装飾として使われたのみならず、敵を威嚇するため、または、時に兜に与えられる打撃を和ら

げた。鋏形のうちに一族記章、紋章、様々な象徴のイメージと悪魔の恐ろしい顔があることもあった。庇の中に鋌で留めた2つか4つの穴がされたり、そこに革紐が付けられたり、革紐に選択用の絹墨縄が締められたりした。通常兜の各側に「吹き返し」と呼ばれる翼の形をした湾曲の部分がある。これらの部分はしばしば曲がった板の取り付けることにより形成される。

これらはしばしば装飾的な織物の縁を持っているレザーで覆われて、真ん中に形式が属した所有者の姿を持っていた。それは日本兜の中で最も顕著で珍しい部分の一つである。前へ出て、吹き返しが戦士の顔をよく覆っていた。敵の方向に（左）弓を射て、侍は、体の最も開放的で脆弱な部分である顔が広い折り返しで覆われていることが見えるように、頭をまっすぐ





日本の兜（アゼルバイジャン国立歴史博物館）

事をするべきだ」だと解釈される。だからこそ兜のお土産コピーは貴重で象徴的な贈り物である。アゼルバイジャンの有名な優れた学者、社会主義労働英雄、1972-1981年代にソ連ソビエトのガス産業大臣であったサビート・オルージェフ氏さん（1912-1981年）に兜の贈物サンプルが贈られた。では、1970年において地質科学の博士、アゼルバイジャンの科学アカデミーのメンバーであったサビート・オルージェフ氏さんはソ連ソビエトの専門家や石油とガスの科学者の代表団の指導者と

回すだけ十分だった。矢が命中した時に吹き返しが弾まれ、打撃力が弱められた。それに加えて、後ろから向く剣の打撃対してよく顔を覆う。かなりオリジナルで珍しい兜であって、日本の武器生産の技術と芸術技能のトップだと思われる兜は象徴的である。日本のことわざの一つがそれに関連することは偶然ではないのである。ことわざの「勝って兜の緒を締めよ」が「勝った時こそ気を引き締めて、謙虚に物



してのもとで日本に招待された。オルジェーフ氏はソ連外に連合のガス産業担当役員の人としてだけでなく、やはり才能ある地質学者・200以上の科学出版物と西欧に翻訳されて出版された10冊のモノグラフの著者として知られた。日本において彼の功績を認識としては、オルジェーフ氏さんに上述の兜を贈った。オルジェーフ氏さんの死亡後、彼の家族は兜を含めて物資の多くを国立歴史博物館に渡したのである。

それでは、比較して結果を出したのは槍の「三角槍」と「薙刀」が実際の戦闘武器で中世の歴史展示品であるということだ。真の名人に作られて、偉大な芸術センスで飾られたこれらの展示品は日本の武器生産の高いレベルを明瞭に示している。同時に、貴重な贈物としてアゼルバイジャンに運んで来れ、20世紀に中世の兜を基本にしても近代的な技術を使って作られた日本の兜は20世紀においてアゼルバイジャンと日本の国民の間の友好関係の歴史的な証拠である。✿



参考文献：

1. ノソフ K. S . 『侍の武装』、サンクト・ペテルブルグ、ポリゴン出版社、2001年
- 2 . アスモロフ K . V . 『白兵の歴史：東洋と西洋』、第一巻、[http://www.fido.sakhalin.](http://www.fido.sakhalin.ru)

3. 博物館の旗・武器ファンドの目録本、第二巻
4. 博物館のお土産・記念品ファンドの目録本、第一巻